
涼宮ハルヒの主演

C1000武田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの主演

【Nコード】

N50290

【作者名】

C1000 武田

【あらすじ】

ハルヒを主演にして

SOS団最後の活動となる

序

- 君はその名で呼ばれるとき、少しだけ反応が遅れる -

- 本能的に君はその名をそぐわないと考えているんだろうね -

- キョウスケ -

嫌な夢を見た。どんな夢だったかは思い出したくも無いが、目覚めるならもっと早く目覚めたかったと本気で思う。

時計を見ると、- AM 2 : 22 - 三つの2がフイーバーしていた。

朝比奈さんの卒業まで後、1ヶ月。

SOS団のタイムリミットもだ。

- 涼宮ハルヒの主演 -

とある放課後……なんて始まりはどれだけ繰り返しているのか、そう気になるもののその通りであるのだから仕方がない。
いつもの部室でふと漏らした涼宮ハルヒ

「もう一度映画を作るわよ」

カメラ、エアガン、きぐるみ、衣装の数々、久し振りに見たハルヒ謹製 監督腕章にメガホン。机に並べた機材、雁首を揃えたSOS団 団員達を前に涼宮ハルヒはそう断言した。

「今度はね、ずっと考えていたあの続編なの。有希を主演に事を進めていくわ。ただし！ 今度はね」

長口舌でハルヒが映画のアイデア、プロット、構想について語りだし、朝比奈さんはおっかなびつくり首肯を繰り返し、何やら今度は自分に被害が少なそうだと考えているような。でもそんなことは決して無いんですよ、朝比奈さん。

たまには反論すればいいのと思う古泉はいつも通りだった。なるほどを繰り返し、首肯を続けている。

今回 主演に抜擢されそうな長門もいつも通り、ハードカバーの本を読んでいる。ハルヒの話は全く耳に入れていない…… ように見える。

その三者三様の雰囲気を見つ、毎度自分に出来ることは小さなことであると諦めに似た心境。つまり高校2年生ながら、老木のように達観している俺であつたがふと思いついたアイデアを漏らしてしまった。

「出るなら自分でやれ」

ハルヒはこの提案について、喧嘩を売られたと感じ取ったのだろう。即座に臨戦態勢に入った。その瞳の輝きはいったい何ボルトあるんだろうね。団員の他愛のない発言を一蹴すべく、口を開こうとしたハルヒに対し、続けて俺は言い放った。

「朝比奈さんも長門も別に古泉だっていいが、お前はどつなんだ？」

涼宮ハルヒの主演。そいつはどうだ？ 上手くいけば注目を集められるぜ。ってハルヒが2作目の映画を作るとなれば、世界、いや宇宙的に注目の的なんだろうが。

誰がカメラを回すの？ 監督はあたしじゃなければ務まらないじゃない！ という当然の杞憂については、鶴屋さんや雑魚である谷口や国木田に頼めばいいし、SOS団の活動に興味があるといっていた佐々木もOKするかもしれない。そうなれば、橘や周防も協力してくれるだろうと返答した。

「まあ、鶴屋さんなら間違いはないけれど。あんたの友達……佐々木さんね」

妙に佐々木という単語に口の端を歪めるのが気になったが、しょうがない。佐々木とハルヒ、あんなことがあった後では、普通に接しようとしても少しぐらいの摩擦は何かしらあるのであろう。

舞台裏の発動機を舞台に上がらせるには骨がいったが、交換条件にてハルヒは珍しく俺の進言に頷いた。俺の提案に幾つかの合理性、論理性、興味があつたのだろう。自分の意見が採用されたことに、これで世界が平和になっていくと安心した国連軍縮局代表の様に安堵の着席をしていると「ただし」と強力に俺をねめつけた後「あんたも出るのよ」とハルヒがそう言った。

そう来たかと思い、当然かと納得した。まさか恋愛映画にはなるまい。

さて、どうすればいいんだろうね。

そうやって、SOS団全員が出演する映画を作ることがこの秋に決まったんだが、秋の文化祭には決して間に合うことは無く、ハルヒ

主演女優兼超監督もこの映画については良いものを完成される為、時間という概念を忘れ去ることにしたらしい。

完成は春を予定。

おそらく朝比奈さんがここに在籍するまで。

どんな映画になるのか、俺には珍しく不安よりも期待が先行していた。

携帯が鳴った。

11桁の数字とディスプレイに浮かび上がる名前を見つめた後で、向かいのハルヒの顔を見る。不機嫌でいて、意地悪く睨まれた。

「もしもし」と俺は僅かにハルヒから背を向け、携帯に返答した。

「やあ、キヨン」と佐々木の抑揚された声だった。

放課後。

そろそろSOS団の下校時刻であつたが、ハルヒに早上がりを告げ、みんなにも挨拶をしてから先に学校を出る。もう少し遅く、せめて帰り道で携帯が鳴ればいつも思う。ハルヒは一言「ふーん、あつそ」といつもの態度で「早く行きなさい」と退出を迫られた。

日没前の北高の坂を下るとそこに佐々木と周防九曜がいた。「やあ、キヨン」抑揚のない声。さっきもその台詞は聞いたぞ。遅くなって済まないと声を掛けた。十人中八人が一見して目を惹かれると古泉が評価した俺の中学時代の同級生という属性を持つ佐々木だ。

「あなた——の学校は——とても」

続きの台詞はなく、九曜が微笑んだ。
相変わらずパーフェクトに無意味な台詞だ。

光陽園女子の近くにある九曜の自宅で佐々木と差し向かい、勉強をする。九曜の住まいは長門のマンションにも似た無駄なものが一切ないシンプルな造りで、対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェースが立て続けにこういった住まいであることについて人間はひょっとして要らないものが多すぎる生き物なのかもと考えさせられる場所だ。

その九曜もノートとペン、参考書は広げているものの眉一つ動かさないでこつちを監視している。長門が本ではなく、興味の対象がもし俺になったらこんな感じになるのかもしれない。
九曜はその黒曜石を切り出したような生の黒い瞳をこちらに向けて、時々薄く笑う。

こんな風になってから、大体2ヶ月ぐらいになる。

佐々木とハルヒのいざこざが収まってからも、学業に身を入れない俺に母親と何故か佐々木が下した処置だ。ハルヒと佐々木のいざこざが4月、そんなこんなで集中できず5月中旬テストは最悪の結果となる。放課後、いつもの部室でテストの結果に青ざめている俺は「SOS団の活動を自粛させられるかもしれん」とハルヒに切り出した。前々から友人と遊び呆けていることについて、母親は常々苦言を漏らしていた。

中学時代とまるで同じに隙あらば、俺を学習塾に放り込みたいと考え、そして今回の結果はその動機にこれ以上ないものであった。

「はぁ？」とハルヒは信じられないと怒った。

「五人揃ってSOS団なの！ いいキヨン。そんな情けない理由でSOS団の活動に影響を及ぼすなんて100年早いわ！」

キヨンの癖に何考えているのとハルヒはまくし立て、返却されたテストの答案を俺から強奪すると、一枚一枚を睨みつけ、表情を急に崩したかと思えば、大いに笑い飛ばした。

「ほんとバカね、ここなんてちょっと考えれば解るでしょ」

笑い飛ばし、諦め、同情に満ちたハルヒの百面相に腹は立つが、いやいや今回のテストは本当に弁解の余地が無いほど悪かった。その直後 ハルヒはSOS団を上げ全面的に俺の成績を上げるようバツクアップすると宣言した。放課後のSOS団 その活動はどうしてこうなったのか……あらゆる教科の予習・復習、つまり勉強の場となった。下校時間になり、帰り道でハルヒはこう告げる「キヨン、繰り返しが大事なの」と。

「みんなは先に帰っていいわ。バカキヨンに付き合うのには一人でいいし」と俺を北口駅 例の喫茶店に連れて行き、参考書を開かせ

俺の奢りになるであろう紅茶を飲みながら。

その時だった。

参考書 横の携帯が鳴った。ハルヒも同時にディスプレイを覗き込む、何の変哲もない苗字だったがハルヒの片眉が器用に上がる。

「やあ、キヨン」

佐々木だった。

「今、どこにいるんだい？ ぶしつけ勝手なのは重々承知しているが、いささか話したいことがあってね。現在地を僕に教えてくれな
いか？」

手で声を押さえつつ、目の前の睨みつけるハルヒの瞳を交わしながら、佐々木に返答する。今は北口駅前の喫茶店でハルヒと一緒にいることを告げると、それは都合がいい 10分ほどで向かうので待っていてくれないかと佐々木が言った。携帯はあっさりとそこで切れた。

喫茶店の扉が開いて、佐々木がひょこりと顔を出した。

「キヨン。涼宮さん、どうも。」
と佐々木が笑む。

ハルヒは珍しく表情に困っていた。微笑むでもなければ、怒っている訳でもない。俺は俺でハルヒ特製 問題集の穴埋めに必死になっていたが、来客に落ち着いて問題に取り組めない状況だ。

「どうしたの佐々木さん？」
とハルヒは優しく聞いた。

と、同時に「貸しなさい」と俺が問答していた自製の問題集をひったくる。

佐々木は席に座ると

「ちょっと涼宮さんとキヨンに相談があつてね。突然、お邪魔して

悪いと思うんだけど」
女言葉でハルヒに

「キョン。率直に言うと、僕は夕方 君のご母堂に偶然ではあるけど出会ってね」

男言葉では俺に話しかける。

佐々木は偶然、俺の母親に会ったらしい。そこで世間話もそこそこにいきなり俺の成績が悪くなっていることをまず聞かされ、佐々木が通っている予備校について詳しく聞かれたそうだ。

「そんなに成績は悪いんですか？」

母親がどう答えたかはわからないが、そこで佐々木が提案した。

昔のように私が一緒に勉強しましょうか？ と。母親がその佐々木の提案にどう反応したかは想像し易い。恐らく、図々しくも是非にと頼み込んだのだろう。

「と言う訳でキョン。同じ予備校に通うわけではないが、また一緒に勉強することになった」と佐々木。

ハルヒは黙って聞いていた。

「佐々木、自分の勉強で手一杯だと聞いていたんだが、忙しいんじゃないのか？」

俺は佐々木に時間的に余裕があるのかどうか聞いた。前回聞いた佐々木の予定では俺の勉強を観る時間などあるはずもない。

「ああ、そのことだけど　ちょっとしたパラダイムシフト。僕にとって世界が変容するような体験があったため、スケジュールに修正を加えたんだ」

予備校の時間を削り、その分を偶然にも俺の勉強を見ることが出来ると佐々木は言った。迷惑で不躰な母親の提案、いや佐々木の提案に迷惑を掛けるわけにもいかないと言ってみたが、君の学力が向上するまでの暫定処置だ。僕は別に嫌もないとあっさり切られた。

そして、

「涼宮さん、キヨンの勉強についてだけど」

「えっ？　うん」

寝耳に水。突然、水を向けられたハルヒは驚いていた。

「涼宮さんの方でもキヨンをほっておかないでしょう？　キヨンの勉強を毎日見ると思うんだけど、涼宮さんが見られないときは私が」

「代わりって訳？」

言葉に慎重になっている雰囲気はハルヒから感じる。うんと佐々木が微笑んだ。どうしてか緊迫感が感じられる。この二人の空気はなんなんだ。

「そう、私は涼宮さんの代わり。勿論、涼宮さんが最初にキヨンの勉強を見て、私はその見られない時に手伝うわ」

俺の意思というものは存在せず、母親とハルヒ、それに突然参加を表明した周回遅れのランナー　佐々木は俺を勉強漬けにする気らし

い。

「涼宮さん、毎日キヨンの勉強を見ているの？」

「まさか
とハルヒ。」

いやでも団長としてキヨンの成績は責任持って手を加えるわと若干訂正してハルヒは佐々木に告げた。

「涼宮さんとキヨンが毎日勉強をしているのなら、私の出番はない
んだけど……」

佐々木が遠慮がちに問う。ハルヒは黙っていた。

「キヨンのことはSOS団内のことなんだから黙っていればいいの
よ！」

とでも言うのかな？ とか考えていたら、ハルヒは俺の成績が安定するまで団を挙げて勉強するようにするけど、佐々木さんの事は佐々木さんに任せるといった。

そういったハルヒが少し寂しそうに見えた。佐々木を前にするとハルヒは今まで見せたことのないような戸惑いや、歯切れの悪さを見せる。それはとても新鮮だ。

「ありがとう、涼宮さん」
佐々木はこちらを向いた。

「さて、キヨン。今日はもう失礼するけれどまた連絡するよ、直ぐに。明日にでも」

そういつて、佐々木はほとんど口をつけていないコーヒーを残して、喫茶店を出て行った。

「ここが違つ」

佐々木の後ろ姿を見ていた俺にハルヒが声を落とす。

「ここも。何度同じミスしてるの。やる気あるの？ バカキョン！
」

自製 問題集を顔に突きつけて、ハルヒは思いっきり怒っていた。

映画の話を進める前にいつだったか、古泉のニヤケ面は突然としてこんなことを言い出した。

「涼宮さんがもう一度世界を否定する時はどのような時でしょうか？」

「何の話だ」

「キーパーソンであるあなたに一度伺っておこうと思ひまして、さつき言つた通りです。涼宮さんがもう一度、閉鎖空間を発生させ世界を否定する、そのようなシチュエーションについて。否定、そして再構成が行われる我々にとって最もどのようなになるか解らない未曾有の危機的事態というやつですよ」

場所は部屋だった。

「ハルヒはもう二度と世界を改変するようなことは起こさないんじゃないかな」

俺は自分自身の防御陣形を構成している盤面を覗きながら、曖昧に答えルークを左へと動かした。

「何となく……でしょうか？ 確かに近頃の振る舞い、波動は落ちていていますからね」

チェスは珍しく古泉が優勢な局面で、ハルヒたち女性陣は5分前に帰宅した。

「ただ一方で、だからこそ何かの弾みで二度目の情報爆発も起こり得ると考えられます」

平穏さとは何か事象が起きる前触れに過ぎませんと古泉。平穏が長く続くとそろそろ不幸が来そうだと考えるタイプなのかね、そんなんじゃないぜ。

「考えたくない」と俺が答える。

「そうおっしゃらず。ある程度 作戦を考えておくと、後々、役に立つかもしれません。思考の展開は決して悪いものではありませんからね」

ポーンを一つ一つ並べ直しながら俺の出方をうかがう古泉

「機関ではどんな意見が出ているんだ？」

盤面の一角で駒の取り合いを開始した。その盤面を見つめつつ、腕組みをした古泉。

「我々は涼宮さんの感情について、特に悲しみに重点を置き分析をしました」

「大した分析じゃないな」

古泉は頷いた。

「おっしゃる通りです。我々も月並みな意見でしか持っていないませんが、拝聴していただいてよろしいでしょうか？」

言ってみろ。

「まず一つに涼宮さんの近しい人の死があります。家族、恋人、友人などもし仮に死に至る別れがあったとして、涼宮さんがそれを肯定できず、否定。再構成を考える可能性は高いと思われます」

古泉が手を広げた。

「仮にあなたがもし死ぬようなことがありましたら、涼宮さんは世界に絶望し、あなたの死を肯定できず再構成をするであろうと僕は考えます」

俺が首を傾げる。そういえば、それは朝倉涼子を含む急進派の結論だったな。

「嬉しくない想像だな」

「失礼。もしそうなれば、洗いざらい涼宮さんに真相を話し、あなたの復活を僕も祈りますよ。ふふ、あなたは決して死ぬことすら出来ないのですが、おっとこれは話が別次元でしたね」

「他には何がある？」

「感情のもつれでしょうが、こちらは恐らく可能性は低いでしょう」

「どうしてだ？」

「涼宮さんは勉強も家庭環境も、対人関係も全てにおいて良好を保っています。我々という友人もいます。家族も落ち着いたもので、何の問題ありません。恐らく、涼宮さんはどんなことが起こっても、そのスキルの高さで問題を問題としないでしょう。ただ……」

「何だ？ ハルヒが苦手とすることでも有るのか？」

古泉は声のトーンを僅かに下げる。

「恋愛感情については難しいところです。相手次第、運命にも拠ります。その男性が涼宮さんを気に入らなければ、それまでになります」

笑む古泉。

「いくら涼宮さんが好意を向けても相手に伝わらなければ、或いは相手に特定の人物がいるのであれば、その恋愛は成就しがたいでしょう。恋愛における感情のオーバーラップは不定数、つまりXに幾

つの数字が入るのが検討もつきません。」

ハルヒが恋愛ね、精神病の一種だと高説を聞いたからピンとは来なかった。そんなことあるのかね？

時間を無駄にすることを一番に嫌うハルヒが価値を共にする相手があっさりで見つけられるとも思えない。

「それで世界を再構成するってのはハルヒらしくないんじゃないか？」

と云った後で、いや　やはりハルヒらしいのかもと考え直した。

「悔いのない人間なんて居るはずありません。涼宮さんとて、やり直したいと願う気持ちがどこにあるでしょう。それが常識的にはやり直せないと解っているからこそ、世界は正常となって続いているのですが」

その続きを古泉は真顔で答えた。

「僕たちはまだ後悔という意味が解っていない方なのでしょう。それは現時点が真つ最中ということであり、少し先の未来から考えれば。さて、我々は後悔を幾つ抱えるんでしょうね」

言った後で古泉は笑みを広げた。

チェスは決着は付いていたが、席を外そうとはしなかった。

「他には」

「現体制の崩壊……というのはどうでしょうか？ シナリオ的にこれを僕は大いに杞憂しています」

「なんだそれ？」

「SOS団のメンバー構成の変更、或いは特定メンバーの消失です」期待していた新人は佐々木とのごたごたの後、蹴つちまったし……しばらく、というか恒常的に5人での活動をハルヒは目論んでいるように思う。

「朝比奈さんの卒業時、彼女はこういう振る舞いに出ると思いますか？ 朝比奈さん自身、そして涼宮さん自身」

そういえば、そうだと気付いた。同じ学校ではないという所属変化は何をもたらすのだろう。部室の角にある朝比奈さんのコスプレ衣装を見る。

「朝比奈さんは未来に帰っちまうかもしれないな」

ただその可能性は低い。未来人である朝比奈さんが消失することによってハルヒの感情がオーバーラップし、情報爆発が起こればおそらく未来もただではすまないはずだ。彼女が帰途に着くときは、恐らく未来が確定されたその時だろう。それまではどんな形にせよ、俺達の側 いや、ハルヒの側にいてくれるはずだ。

「鋭い明察ですね、そうであると僕も願いますよ。ただ、体制の変化は個人やチームに必ず変化を要求します。僕の杞憂はなぜ朝比奈さんが一つ上の学年でありながら、未来人側の観察として選ばれたのか。同学年の人間を用意できなかったのか、或いはどうして」

古泉は口だけ笑っていた。年齢を秘密と云った際、確かに同学年という設定であつてもおかしくはないと思う。1歳歳下だと言われても信じてしまえる。

「そんな都合よくお前の思案通りにいかないさ、一つ上の学年という設定の方が観察という観点からはいいと考えられたんだろう」

同学年では巻き込まれる可能性がある。だから一つ学年が上さ。ただそれでも朝比奈さんはSOS団に入団する。それはハルヒとこれほどまでに接触するとは考えてもなかったはずだ。

「都合よくいくのはいつだってハルヒの頭の中だけさ」

古泉はもう一度頷いた。

「杞憂であればいいですね」

朝比奈さんが卒業することについて、朝比奈さん本人にそれとなく聞こうと考えつつ、いや、やはり辞めておこうと迷走。ハルヒと俺たち、SOS団は映画作成について活発な意見交換を実施していた。

場所はやはり文芸部 部室である。

「没ね」

「ものすごく考えたんですけど……」

第二回 SOS団プレゼンツ 映画作成についてはハルヒは珍しいことを言い出した。ハルヒの一声で、今回の映画の方向性 脚本などはSOS団全員によるコンペティションが行われることになった。独断専行作戦無視のハルヒにとって、これは成長した証なのだろうか。おかげで要らぬことに頭を悩ませることになったのだが……

朝比奈さんの映画立案は恋愛映画、これをハルヒは気に入らなかったようで却下した。浦島太郎とかぐや姫を合わせたような話で、最後にハッピーエンドで迎えることが救われるのだが

「面白いけれど却下ね、SOS団としてこうグツと来るものがないの。眠り続けるのが男って言うのもどうかと思うし」

朝比奈さんプレゼンツのホワイトボードに書きなぐられたストーリーと構想とアイデアはハルヒによって、消されてしまう。未来人のシナリオ通りには行かなかったようだ。その後、古泉の提案もあっさりと却下したハルヒ。頭上最も目映い光をこれからも放ち続けるであろうハルヒその星団を思わせる瞳がこちらに向けられた。

「次は？ キョン、あんた何考えてきたの？」

「何も考えていねえ」

と言ってみたものの、ふと俺はいつだったか、文芸部として本を発行した時のことを思い出し、提案した。

「ハルヒ。鶴屋さんが創ってくれたあの短編小説を映画化するってのはどうだ？」

秀逸だった鶴屋さんが書いてきてくれたあの冒険小説だ。『気の毒

！ 少年Nの悲劇』と題された短編ドタバタ小説は、読む者すべてを残らず笑い転げさせた。そいつを映画化して、同じように面白い物語いや「映画」にして世の中に送り出す、これこそがSOS団にしか出来ないことではないだろうか。鶴屋さんの躍動した文体からなるスラップスティック小説は我々が映画化するのに相応しいんじゃないか？ ってね。

勿論、原作者の鶴屋さんにも協力を要請しよう。監督も引き受けてくるんじゃないかな？ ハルヒは一言

「キヨンにしてはいいアイデアだね。他に何もSOS団に相応しいアイデアがなければそうしましょう。鶴屋さんもきつと了承してくれるわ」

唯一、ハルヒとタメを張れる鶴屋さんの力を借りるのは忍びないが俺の頭はまったく映画について働かなかった。

ハルヒの矢を退けた俺、そして、次。

「なにこれ？ 有希」

「脚本」

数分後、長門が提出したSOS団の記録と表された分厚い冊子を眺め続けていたハルヒは一番の代表監督のように決断した。

「これにしましょう！ これしかないわ。有希の脚本で私たちの記録。そう、SOS団そのものを記録として残すのよ！！」

長門が提出した脚本、というかシナリオ、というか文字の羅列には

全て記録されていた。初めて俺たちが長門と出会った時の会話。長門が知り得ている情報全て、その冊子に書き込まれている。ページを少しめくった。

「これからこの部室が我々の部室よ!」「ちよつと待て。どこなんだよ、ここは」「じゃあ、文芸部なんだろ」「でも今年の春に三年生が卒業して部員ゼロ、新たに誰かが入部しないと休部が決定していた唯一のクラブなのよ。で、このコが一年生の新入部員」「てことは休部になってないじゃないか」「似たようなもんよ。一人しかいないんだから」「あの娘はどうするんだよ」「別にいいって言ってたわよ」「本当かそりゃ?」「昼休みに会ったときに。部室貸してっていったら、どうぞって。本さえ読めればいいらしいわ。変わっていいと言えは変わっているわね」「長門有希」「長門さんとやら」「こいつはこの部室を何だか解らん部の部室にしようとしてんだぞ、それでもいいのか?」「いい」「いや、しかし、多分ものすごく迷惑をかけると思うぞ」「別に」「そのうち追い出されるかもしれんぞ?」「どうぞ」

ハルヒから受け取った長門製作の冊子にはほぼ全ての会話が一字一句間違いないに記載されていた。ハルヒは長門の記憶力を絶賛賞賛しているが、それだけでは絶対に説明が付かない記録である。ただまあ、しかし、「長門だったら」で納得できるのだろう。

こうして俺達 2度目の映画作りはなんというか、ただのドキュメンタリーになりそうだ。まあ、これ以上ないといえばこれ以上ないという感じはある。各々が各々を演じることも、大した問題を生まないだろう。

不認可のSOS団だが、公式資料として何かを残しておくのは悪い話ではない。膨大なシナリオから、さて何を選ぶべきなのか。

まあ、そこらへんはハルヒに任せるとしよう。

時間の経過は随分と淡々としたものだった。あれやこれやあったことを文字にするとそんなものだったのか？ とふと想い返す。

俺が今見ているのは長門有希謹製の会話集なるデータだった。ディスプレイには時間と場所、人物と台詞がびっしりと書き留められている。驚愕したのは俺だけだったが、普通では絶対にありえないぞともあれ、これが涼宮ハルヒ超監督の目に留まり、見事コンペティションを勝ち抜け、採用となったことに別段、否やはない。ただ、長門が執筆した……というか、記録してくれたSOS団行動集は映画にははつきりと言って不向きだった。

一つ目、量が多い。

二つ目、データとして秀逸だが、脚本として成り立たない

三つ目、抜粋するべきだ

といったようなことを進言すると超監督であるハルヒは即座に俺に脚本としての変換作業を命じた。

「有希のクレジットは残すこと。文芸部として、これはこれで重要な活動の一つになるって訳」

ハルヒは腕組みをして、目を閉じた。頷くハルヒ。恐らくはあの生徒会長の顔を思い浮かべているのであろう。思いついたようにまた、

ハルヒの瞳が見開くとこつちを見据えた。

「そう！ 小説も売り出しましょう！ これはいいアイデアだね、映画と同じシナリオ 小説を書くの」

私たちの記録のねとハルヒ。「となると映画の音声はOFFね」とハルヒ

「前々からあたし映画の台詞つての気に入らないの。邦画だからかな？ とにかく稚拙で感情的でなくて、なーんか拍子抜けしちゃうのよね。」

サウンドはいいんだから、いつそサウンドだけで雰囲気だけの映画って言うのもなどどぐだぐだとハルヒが映画論を語りだした。

それは役者が下手なだけじゃないだろうか、良くある多様な芸能人にありがちな棒の演技というやつだろう。ところでハルヒ、その小説と脚本の変換は古泉に……

「あんたがやるの」

俺は不肖不肖ながらも了承し、いつもの言葉を口にした

「やれやれ」

しかしながら、音声をOFFって

そんな訳で勉強の合間にパソコンを開いては、長門データと格闘しながら映画になりそうなシーンを抜粋し、そこから会話を厳選し、何故かテンションがハイへと上がってしまった俺はカメラワークな

ども気になりだし、個人的にこのアングルで取るほうが面白いなど脳内にて映画撮影のリハーサルを行っているのである。

ふむ。

脚本、小説、勉強と文字を乱れ打ち、書く作業をどうして楽しめるものかと思っていたが、案外 楽しめそうである。

長門は提出したものは一切興味ないように普段通りの長門へ。読書をしていた。俺がふと見た瞬間、顔を上げていた長門。無機質なガラス光沢の瞳と目が合った。

「当該データには涼宮ハルヒの力に関する会話は全て削除してある」

長門の声を聴きつつ、マウスを操作してディスプレイ上の長大なロールバーを動かした。

「もしあなただけが閲覧するのであれば、データは直ぐに用意できる」

そういった長門の言葉。興味がある。いったい長門はどれほど観察対象として俺たちを把握していたのか？

「今は当該対象者がこの場にいない限り、記録は行えない」

そう言つて長門は読書に戻った。長門なら可能だろう。俺や古泉との会話、俺と朝比奈さんだけの会話、俺とハルヒだけの……。そこで深く想い返すのは辞めておいて、俺はまたディスプレイに文字を打ち込んでいく。

長門有希。

長門は俺が知る限り、自宅での料理はレトルトや出来合いの物ばかりのようである。合理性重視というべきであろうか。おそらく、創作の楽しみを知らないのだと思われる。今回、提出してもらったデータについても小説とは程遠く、これに何を乗っければ小説になるのか。このままではハルヒの言うような小説には決してならないだろう。台詞としては無駄を省いた秀逸なシナリオと成り得るかもしれないが……相変わらずよくぞここまで丁寧な記録を残せるものであると長門に感心し、いや、長門のやることならば何をしても驚かないと自分自身で妙に納得してしまった。

「長門さんがそれ程の能力を持っているなんて凄いことだね。僕が感嘆するのはその無口・無表情・無感情・無感動を貫けるという部分だね」

佐々木と勉強の合間に不意に先の長門の話になった。ついでにSOS団の小説化と映画の脚本まで手掛けることになっちまったと話す。

佐々木は長門についてひとくさり話した後

「例えばキョン。……僕は君が好きだ」

何の冗談だと思いつつ、そう口にしようと思ったが目の前の顔を見ると佐々木はほんのりと頬を赤らめ、憂いた瞳をこちらへと注いできた。冷静すぎるほど冷静な佐々木のいつもの言動と表情。その二つに反する余りの違和感を……感じる暇などあるわけもなく、俺は息を飲むことを忘れていたのでつばを飲み込んでしまった。

ゴクリ

「というように、人は情報によって表情・感情を変化させる」

佐々木が笑む。そして人差し指を軽く回し指摘する。佐々木の表情はいつも通りだった。演技だったようだ。

「僕が君を好きだといった瞬間、キヨンはまさかと本当に？　という二方向の悪性と良性の疑念へと感情のベクトルは触れてしまったんだよ。恥ずかしながら、僕の台詞にそこまで動揺して頂けるのは光栄だな。長門さんもしかりだろう、自分が知った情報に対して無表情でいられるということが」

彼女は流石というべきなんだろうねと佐々木がクツクツと笑った。

「例えば、僕がキヨンと朝比奈みくるさんだったかな？　彼女と恋仲になっていると知ってしまうと僕の目には意識無意識に関わらず、嫉妬の光を宿してしまうかもしれない。それ程、情報から感情への起伏は厄介なものなんだ。知り過ぎているということは怖いものでもあると思わないか？　キヨン」

戦国武将も盛んに使ったという扇動だの反間の計ってやつか。

「人は容易い言葉に流されやすいものなんだな」

「僕のさっき言った好きだという言葉は容易いといった類いのものではないけれどね」

ともう一度、真剣な表情で言った。その後で佐々木は表情を崩すと、

クツクツと笑った。

「好きだよ、キヨン」

「スズキキヨウスケ？ 冴えないわね」

以上、涼宮ハルヒが俺の本名を知った時の反応である。

別段 隠していた訳ではないが、何となく話す機会を失っていた。自分の姓名について少し語ろう。苗字は平凡な鈴木に、キヨウスケという漢字は京介でも恭輔でもなく今日輔と書く。

物珍しいこの字面の意味、それは遠い昔ちびっ子のときに親父に尋ねたことがある由来。今日輔 たすけるという意味があるらしいのだ。

「今日輔なんかよりもあんたにピッタリ」

と涼宮ハルヒが太鼓判を押してくれた呼び名はかつて親戚一同が集まるゴールデンウィークだったと思う。その時、親戚各々にはストリートにきょうすけとでなく、きょうくんでもなく今君（いまくん）と呼ばれていた。そこから、確か叔母の一人だったように記憶している。何年か前に久しぶりに会った時、

「まあキヨンくん大きくなって」

と勝手に俺の名をもじって呼び、それを聞いた妹がすっかり面白がって「キヨンくん」と言うようになり、家に遊びに来た友達がそれ

を聞きつけ、その日からめでたく俺のあだ名はキヨンになった。
くそ、それまで俺を「お兄ちゃん」と呼んでいてくれたのに。
妹よ

自分の姓名に感じて、何分言うこともないのだが、ある出来事があったことを先に片付けておかねばならない。

佐々木とハルヒの断片的な事件について。

破

長門が熱を出した宇宙的エマージェンシーと言える事態の最中、

「彼らの侵攻が再開された。その目標はSOS団最大の防壁壁となる長門さんです」

そう、いつになくシリアスな表情で語った古泉。

ハルヒを先頭に熱を出し、寝込んでいる長門のマンションに速攻で向かった俺たちSOS団。インターフォンを鳴らし、ハルヒが矢継ぎ早「有希？ あたしよ」と返すとオートロックのドアは開いた。だが、出迎えたのは異質な地球外生命体”天蓋領域”と呼称される周防九曜だった。

「彼女は——今眠って——いる」

驚愕に満ちた。

「彼らの侵攻——」と語った古泉の台詞を脳内で考察、俺の胡乱な頭脳が導き出した当該対象である。そう、推察した張本人がそこにいたのだから、無理もないだろう。だがハルヒの眼前でもある。

とにかく、注意深く九曜、そして古泉と目を合わせ、出方を伺っていた。俺が記憶している限りでは、瞬きをしない周防九曜は一度瞬きをすると目の前にいるハルヒへと瞳を合わせた。ハルヒはこう問い掛けた。

「あなたはどちら様で、どうして有希ん家にいる訳？ ……どこか

で会ったかしら」

ハルヒは確実に怪しんでいる。というか、以前の出会いを覚えていないらしい。

「私——は計都。この階の隣に住ん——でいる。あなた——あたしはどちら——様？」

計都？

「涼宮ハルヒ。有希の同級生よ。そっちもみんなそう」

ハルヒが親指で後ろを指した。計都と名乗った周防九曜のそっくりさんはそれぞれに視線をやる。それから俺と視線を交わした瞬間、微笑んだ。

間違いない。

こいつは周防九曜だ。
明らかな合図。

俺は背筋が寒くなる。

エレベーターの前で倒れていた長門を部屋まで運び、そのまま付き添っていたと説明した。

「私は失礼——する」
と計都。

ハルヒと朝比奈さんは長門の眠っている部屋まで雪崩れ込むように足を運び、俺と古泉は入れ替わる——九曜いや、計都を外まで見送

る。

常時、薄らにやついている古泉の顔に見えて欲しくない緊張が見えた。俺も見張る。

「天蓋領域。周防九曜。地球外生命体イントルーダー、そして佐々木」

俺は計都と名乗る周防九曜の生き写しに言葉をぶつけた。何の魂胆があつてここに居るんだ？

「あなた——は誤解している。私は九曜——の双子の妹」

九曜に双子の妹？ 九曜はどうしたんだ？ 何を起こそうとしているんだ、お前らは。

「あなたには九曜——が付く」

そういつて、周防計都は深くお辞儀をすると隣のドアへ手をかける。

「彼女——の処理にはもう少し——時間——が必要」

計都が断片的に言う。

「信じ——て」

計都が伸びきったテープのような声。どういうことだ？

計都が隣の部屋の中へと消え、ドアが閉じた。

「とにかく長門さんの容体が気になります」

そう、古泉に言われてからようやく我に返った。そうだった。

長門の寝室に入る。ハルヒが水タオルで額を冷やしてやっている。
長門はもう何年も寝たきりのようにピクリともしなかった。

「長門！」

俺達の呼びかけに僅かミリ単位ではあるが首肯したように思える。
意識はあるようだ。

「…古泉君」

とハルヒのシリアスボイスは直ちに長門を医者に連れて行くべきだとSOS団 団長として命を下した。

「すぐに連絡をします」

即座に古泉が携帯を掛けに寝室を離れた。

「長門……」

赤く染まる頬、静かだが普段とはまるで違う息遣い、汗に濡れている首筋。長門が対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイスである以上、病気などは最も縁遠い存在だ。

以前、朝倉涼子とのやり取りの最中、怪我をしたときは血を流していた。だが、即座に修復をしていた。長門の宇宙らしさが消えているからかもしれない。

いや、違う。

これはやはり、意図的な攻撃だ。長門に何をしているんだ。怒りがこみ上げてきて、おかしくなりそうだった。頭に血が沸々と上るのを感じる。

タクシーを呼んだ古泉。

俺が長門をおぶさると、朝比奈さんがドアを開けてくれた。隣のドアが絶妙のタイミングで開き、再度、周防計都が現れた。長門を背に俺は身構えた。だが、周防計都は頬に柔らかな形の表情を創るとう言った。

「私も長門——さんが氣——になる。付い——……て行く」

マンションの片隅で、計都の黒い髪が存在感を風景から抜き出していた。

頭を整理する時間が欲しい。

何故こいつはこんな申し出を行えるのか？ ハルヒから力を奪おうとしている存在はどこにいるんだ？ 長門の存在をどうしようと考えているのか、俺は逡巡する。靴を履いたハルヒが立ち止まっている俺たちに気付き、

「とにかく、有希を早く運びましょう。計都さんだっけ？ いいわよ。一緒に行きましょう」

古泉はタクシーを2台呼んでおいたようだ。長門のマンション前に2台のタクシーが止まっている。長門を先頭の車に載せ、ハルヒは助手席に朝比奈さんが長門の隣に乗った。俺はハルヒに

「後ろの車に乗る」

と告げて、後ろに回りこむ。すると周防計都もハルヒが乗っている車には乗らず、後車へと乗り込んだ。助手席の古泉は携帯を掛けている。

古泉は俺が知る限り、機関への連絡・コール・合図などは全て見えないところでやっていた。古泉らしくある抜かりのなさ。失われるように今の状況に俺は恐れを抱く。

「ご安心ください。このタクシーも機関の者ですから」

そういった古泉は静かな不気味さを持つ周防をミラーで伺いつつ、携帯先の相手へ単刀直入に聞いていた。

「現在、彼女はどこにいるのですか？」

俺が周防計都の横に乗り込むと、車は前の車に遅れてようやくスタートした。病院まで10分はかからない、今すべきことは何か？周防計都に状況の説明を求めるのもシャクに障る。その周防計都は運転席を貫くように前だけを見ている。虎穴に入りっぱなしの気分だが、携帯を取り出すと俺は迷いなく佐々木の番号を呼び出した。

2コール後、佐々木が出た。

「計都さんはそこにいるかい？」

もしもという挨拶もなく、抑揚された声。佐々木はそういった。いるさ、と俺は極めて冷静に答えた。

「SOS団ではなく、君に危険が迫っていると九曜さんが教えてくれてね」

お前たちが引き起こしたことじゃないのか？ 俺は素直に聞いてみる。

「まさか、僕たちは平和主義でありたい。そう、考えている。ましてやキヨン、君が相手だからね。」

本当に本当か？

「如何なる手段を用いても、目標を達成したい訳じゃない。ただ、涼宮さんとの関係性について僕にも存念が生じてね。ただ傍観し、客席から寸劇を眺めるといったやり方は辞めにしたんだ。」

どういうことだ、説明してくれ。

「涼宮さんの力。そのソフトランディングについて、僕達は僕達の考えで動いている。ただキヨン、暴力は絶対に無しでね。僕は常に理性的でありたいんだ、君ならそれを知っていていてくれるはずだ。」

じゃあ誰が？

「我々じゃない主流と対流と第3の流れである所の仕業だろうね。」

九曜さんの話では急進派の再燃である可能性が高いとのことだ。君の側にいる長門さん、そして君自身に被害は及ぶ」

俺自身に？　そこに未来人もいるのか。何故そんなことが言える。

「君が重要な一般人だからだそうだ。これは彼の君に対する評価らしいよ。」

クツクツと佐々木が笑った。

「彼が話してくれた未来。聞かなかった方が良かったと思えるけど、聞いてしまった以上、仕方がないんだ。」

佐々木は病院で待っている。そして決して、計都さんと別れないようにと俺に告げた。恐らく滑り出したシナリオに対して、どこでストップを掛けるべきなのか全く分からないまま、俺は携帯を切った。

古泉が首をこちらに向けた

「あなたのご友人である佐々木さん。そして周防九曜さんの居場所は我々が向かう病院だそうです」

その裏が取れたことで俺たちは相当やばい状況にあるのか？　古泉は思惑顔。

「ただあちらのメンバー、橘京子の居場所は補足出来ませんでした」

佐々木は病院で俺を待つといている、一体何をやらかつつもりなんだ？

病院に車が着くまで、後5分ほどだった。

手続きは何もなかった。

病院側は即座に全てを受け入れる手段を講じていた。タクシーが病院前に着くと、救急車が病院内に入ると同じ手際の良さであったという間に長門をベッドへと落ち着かせた。

医師による回診のため、俺たちが部屋を出る。病院内は携帯が禁止だ。佐々木との連絡をどうするかと考えていたら、廊下の奥に佐々木の姿が見えた。

ハルヒが病室前 廊下のソファに座り込み、団員もそれに続く。まるで、重大手術を待つ患者家族の一団だ。そのソファに座らなかつた周防計都と俺。計都は長門の病室 ドア前へと移動して、直立不動の姿勢を崩さなかった。

長門を守るように。

その姿を横目で見ているハルヒに

「ハルヒ、ちょっと席を外すぜ」

「どこに行こつての?」

「病院の外だ。携帯を掛けてくる。」

「早く帰ってきなさいよ」とハルヒ。

俺がもう一度、佐々木を眺める。

気付いた佐々木は小さく手を上げ、指を指した後、ふっと廊下から横の通路へと進み、姿を消した。俺はそれを追った。ここに佐々木が居るという状況は説明し難い。佐々木とハルヒは会わない方がいい。考えながら、廊下を進み、佐々木の居た地点で横に曲がった。

「なっ！」

あっという間に異世界に引き連れられた。

朝倉涼子と佐々木がそこにいた。

笑った佐々木がいて、その後ろに見たくもない朝倉が十人も居た。全員、あの表情と姿で違うのは既にナイフをスタンバイしていた点だろう。

「キョン、すまない。僕は君に嘘を付いていたんだ」

「さ、佐々木、お前」

と俺が言い終わる前だった。

佐々木がすつと挙げた人差し指が綺麗なお辞儀をする合図で、十人の朝倉涼子によるナイフの投擲は済んでいた。朝倉涼子と俺とナイフは相性がいいらしい、と言ってもこれほど嬉しくない相性の良さはもはや説明する気も失せる。投げられたナイフ、その全てを身に受け絶命すると思われた俺に三度救いの手が現れた。

長門ではなく、周防だった。計都か、九曜か、どちらでもいい。ただ、その敵側と思われた人型イントルーダーは俺の前に姿を現すとナイフの全てを分解した。一本は周防の肩に刺さった。だが、瞬間分解し融けナイフは消えた。周防の肩から血が流れ出たもののその傷口もあつという間に修復された。今の一本はサービスのつもりだったのかもしれない。周防は笑みを溢して、十人の朝倉と佐々木へ向かうと一人残らず消去した。

逃げ切ろうと、四方に散った朝倉の一人が限定空間を解除したのだが、その壁は新たな幾何学模様。周防により限定空間が練り直されていたのだらう、大人しく朝倉達は消える運命にあった。

朝倉涼子の量産型を消した後、佐々木について躊躇もなく周防は消し去る。「待て！」と言葉を放つ隙も与えず、ただ一瞬の出来事で終わってしまった。

俺の元へと歩み寄る周防は胸元へ赤いリボンをしていた。記憶を思い返すと計都はブルーだった気がする。

「大——丈夫」と周防が微笑んだ。これが俺を籠絡すべく図られた罠であろうとも、そう進むシナリオであっても俺が安堵したことは間違いなく、周防へは礼を言っておいた。

「いい。こちら——のミス」

幾何学模様が消失していくと、佐々木がもう一度現れた。あの消えた佐々木は…どういうことだ？

「キョン、無事で何よりだ」

「ああ、あれはお前の二セモノだったのか？」

「そうみたいだな。僕は正直怒っている。キョンを引っ張り出すのに、僕を使うなんて。」

「携帯は佐々木本人で間違いないのか？」

「それは僕だ」

「ここに手招いた佐々木に似せた人物が二セモノだったのか」

佐々木は眉を吊り上げて、頷いた。長い付き合いだが、ここまで怒っている佐々木の表情を見るのは初めてだった。

「涼宮さんが待っているから手短に説明をしよう」

佐々木の話は以下となる。

佐々木の唇からすらすらと言葉が流れている、ただ俺は聞いているだけだった。主流派（涼宮ハルヒ）に対して、対流派と目されていた佐々木一派は考えを新たにし

「キョン。僕たちの存在はわかりやすくいえば、影の内閣ということころだろうか」と言った。

「Shadow Cabinet。君たちに代わる存在ではあるが何も不信任を出す訳ではないんだ」

僕には荷が重過ぎると言ったろう。そう、クツクツと佐々木が笑む。

「長門さんへの攻撃も第3の他流派が関与していることらしい。それに対して、僕達は君たちに対して暫定的な関与を施すことに決定した」

身の安全と、長門有希が癒えるまで周防九曜は存在をわざわざ双子にまで分裂、守るつもりがあるらしい。

「周防計都さんと名乗る彼女は別段、本当の双子ではなく、そういう設定らしい。いつでも、そういった周防九曜さん単体に戻れる。ただ、守るべきものが僕と君と長門さんである以上、彼女も分裂せざるを得ないらしい」

便利なものだねと佐々木は感心していた。

「パーソナルは変わらないようだが、明るい計都さんが所望するのであれば、可能だろうね。二人の違いについては、必要ないかもしれないがリボンで見分けるといい」

確かに佐々木の横でたたずむ周防九曜は赤いリボンを身に着けている。だが、赤のリボンを胸につけている周防九曜が口を開いた。

「それはあまり——有効では——ない。私たちは——リボン——を良く取り——替えて——いる……から」

「から」で、周防九曜が笑む。冗談のつもりか、その無意味な言動に危うさを感じながら、運命を共にするしかないと諦めた。どうしようと考えているのなら、とつくに俺の存在なんてどうにかになっているはずだからと。

「今日は一度、これで終わりにするよ。早く帰らないと涼宮さんも

訝しがらうからね」

俺がきびすを返し、ハルヒの待つ 病室前ソファに戻ろうとすると
佐々木が声をかけて来た。

「ああ、キョン。帰りは見守らせてもらうよ。何かあるか分からない。
というか、正直に言おう」

佐々木は端正な顔に笑みを浮かべるところ続けた。

「君の危険はまだ終わっていないんだ」

長門の病室前で待っていたのは古泉だけだった。

ハルヒと朝比奈さんは先に歩き出した。

長門は入院することになり、ハルヒは寝袋を取りに帰ると言ったからだ。

「有希の側に必ず誰がいること」

これが団長命令。

で、ハルヒが戻るまでは古泉が病室に残ることとなった。歩き出した二人に遅れて、俺も行かなければならない。が、古泉に僅かながらに囁く。

「そこにいる周防は味方らしい、佐々木は俺達のバックアップだそ

うだ」

「機関からそのような可能性を打診されても信じられませんでした。何より橋京子。彼女の考えは別のはずです。しかしあなたから聞かれられると……」

古泉は橋について、機関を通した情報に拠れば、相変わらず彼女は佐々木こそが主になるべきだと主張していると発言した。となれば……

「古泉。佐々木と藤原、そして周防が結託して橋を排除する可能性ってあるのか？」

「さて、あちらの内部事情については解りかねます。ただ、あなたから聞いている事情以上に彼らの動きが予測できません」

古泉は立ったまま、言葉を続けた。

「彼女たちの動きはこれまで涼宮さんの力を打ち消し、佐々木さんへと力を譲渡する。不可と思える力の譲渡は触媒が必要となり、それは恐らくあなたなのでしょう。だからあなたを籠絡して引き込むとする考えだと推測していました。しかし、長門さんの熱、そして第3派の動き。あなたから聞いた状況では彼女たちは我々を保護しようとする立場でいる……そこに違和感を感じます。」

俺はいったい何なんだ？

「気を付けて下さい。ハードにあなたを引き込む方法も、ソフトにあなたを引き込む方法も手段は違えど、最終的に目的を達せられれば良いのです。」

つまりSOS団を壊滅させるか、俺にとってSOS団を無価値なものにさせるかということか？

「その通りです」

ハルヒ達が随分先へと歩いていった。走らなければ、追いつかない。

周防計都と目を合わせる、相変わらず病室の前で立っている。

「長門を頼む」

「お気を付けて」

長門も古泉も居ないSOS団。何か起こるとしたら佐々木の警告通り、ここだろう。

その通り。

病室を出て、一路駅へと向かう俺たちはあっという間に事件へと巻き込まれた。

炸裂した車のブレーキ音。

驚いてそちらを見ると3台の車がまるで、F1レース中のようなクラッシュを起こしている。前方の2台に対して、後方1台が後ろから、玉突きを起こした形で道路上の3台はある車は横向きになり、またある車は逆向きとなり、道路を塞いだ。この事故に対して、ハルヒは即座に介入した。

朝比奈さんに警察と救急車を呼ぶように指示し、ドライバーの安否を確かめに行く。派手な事故にしては、車体が極端に凹んでいる訳でもなく、それ程 大きな怪我に繋がるような事故ではないだろう。

「キヨン、これそっちに投げてて」

とハルヒはドライバーから受け取った発炎筒をこちらによこした。

その時だった。

どう使うんだ？ と発炎筒の使い方を眺めながら、道路中央に居た俺。通常、車が走ってくる道路上にいますと言う認識が極端に薄れていた。

「キヨウスケ！」

声がした。

「キヨン！ 危ない！」

同時にハルヒ

「キヨン君！！」

と最後に朝比奈さんの声だ。

！？と虚を衝かれた。

目の前をスピードの出そうなヘルメットを被ったバイクが俺の方へ

と猛スピードで突っ込んで来る。最初に聞こえた自分の名前を呼ぶ声を聞いて、そちら側に反射的に身体を投げ出し、九死を得た。その声がなければ、目の前の猛スピードで迫り来るバイクに気が付くことが出来なかっただろう。

前方3台の事故に対して、バイク一台なら抜けられる。そう考えたライダーだったのだろう。人の存在を考慮しなかったのかね。急いでいたのか、すり抜けようとしたバイクに、俺はもう少しで轢き殺される場所だった。バイクのライダーはそのまま、何事もなかったかのように前方の車を避け、ハルヒの横をすり抜けていった。

「事故に事故を重ねるところだったな、キヨン。」

俺が転がった先に佐々木が居た。

啞然として、声が出ない。呆然と座り込んでしまい、動けなかった。ハルヒがこちらに駆け寄ってきた。佐々木は俺に手を伸ばして、立ち上がるように示唆した。

「キヨン。君はその名で呼ばれるとき、少しでも反応が遅れる。本能的に君はその名をそぐわないと考えているんだろうね。」

ハルヒも今の言葉を聞いていた。そういや、佐々木とはここで初対面のはずだった。立ち上がると俺は

「たまたまか？」

「ああ、先ほどここを通りかかってね。何やら事故らしいと伺っていたんだが、まさかキヨンと涼宮さんがいるとは思わなかったよ」

「佐々木さん……ありがとう」

ハルヒが礼を言った。

「いえ、私は何もしていないわ。涼宮さん、キョンが気付いたから良かったですね」と佐々木。

そう言った佐々木の隣に周防は居なかった。

程なくして、長門が復帰した。

目を開いた長門は自力でベッドから起き上がると「大丈夫」とか細かい声で伝えた。ハルヒの寝袋は俺の時より出番はなかった。

念の為、もう一日寝ていることになったが表にいた周防計都はいつの間にか姿を消していた。

「長門」

「何？」

全員が居なくなったのを確認し、俺は最後に病室を出る前にこう言った。

「本当に問題ないのか？」

「問題はない」

長門は病室のベッドから中空を見上げ、そう答えた。

「ただ」

「どうした？」

「私の力が」

「……」

何も言えなくなった。

長門は自身を無力化にされるとは露とも思わなかったのだろう。長門が居ないあの時点でハルヒを含め、俺や古泉、朝比奈さんに直接的に危害を加えようとする強攻策を取られていたのならは何の防衛手段を講じる手筈もなかったのは事実だ。周防九曜という相手が現れた時「危害は加えさせない」といつしか長門は俺に発した。なぜか、その周防九曜に守られることとなった。

「今日は帰るよ」

「……」

ドアを閉じた。

帰り道、考えることは山ほどある。

もしいでは有るが、今の長門は既に普通の女の子に過ぎないのではないかと推測した。そして、周防九曜や他の情報統合思念体のみ桁外れであるのだ。そうなれば、長門に万事任せるといった諸事は見直

すべきであり、もし長門に無理を負わせなければSOS団は維持できない体制だとしたら、俺は選択肢を見誤るかもしれない。長門はいつだって長門だった。ただその前提はいつまでも続くわけじゃない。俺の身の置き方で長門を救えるのなら、それも有りだ。俺の居場所は今もSOS団であり、これからもそうだと思っていた。

……

俺はいつか誓っていた。九曜だろうが、天蓋領域とやらのほかの何だろうが、お前をどうにかするような真似は絶対に許さん と。

佐々木。これで絡め取ろうとするのならば、対した作戦だぜ。

その佐々木から、連絡があったのは数日経った夜だった。

「キョン、ケリをつけてしまおう」

携帯の向こう側。佐々木はあっさりとそう言った。

「どうケリを付けるんだ？」

「とにかく、一度会ってゆっくり話したい。共に連れは無しにしてあの喫茶店で話をしないか？」

「佐々木、悪いが長門を連れて行って構わないか？」

「そうか、そうだね。キョン、君は用心深い。そして今の君の現状では判断できる材料が少なすぎる。分かった、こちら周防さんに

お願いをして、彼女にも出てきてもらうことにしよう」

場所は変えよう。と俺は提案した。

「……確かにその4人が一度に会合しては言い訳が付かないね。では、僕の自宅で。明日は両親は居ないんだ。覚えているのかい？
僕の自宅は」

一度だけ、中学時代 佐々木の家に行った事があった。
それは確か、雨が降っている日だった。それを覚えている。

「では明日。宜しく頼むよ。」

俺は古泉に相談しようかと迷い、結局 長門だけに電話を掛けた。

長門と待ち合わせ、佐々木の邸宅へと着いた。
インターフォンを押すと、佐々木が出迎えてくれた。

「4人が入ると僕の部屋は流石に手狭になる。キョン、ここでいいかな？」

居間のテーブルに既に周防九曜は座っていた。胸元はブルーのリボンをしている。

「朝比奈さんの出すお茶とは比べられないだろうが、まあ飲んでくれ。」

飲んでみた。柑橘の淡い香りがついた飲み物だった。

「気分を落ち着けてくれる効用があるらしい。僕もよく飲んでいる。勉強の合間に、香りは本当に良い気つけとなるからね」

「さて、キヨン。君の置かれている立場について僕から話そうか？それとも、君から聞きたいことがあるかい？」

両方だ。佐々木、悪いが最初に確認したいことがある。

「では、キヨン。君から話をお願いするよ」

長門を狙ったのは誰だ？

周防九曜が何故か、ピクンと反応した。そして薄っすらと口を開く。

「我々では——なく、——情報統——合思念体内部でもない。他者。存——在は不——明」

周防が答えた。

「情報統合思念体内部の他流派ではない」

「また天蓋領域からの攻撃でもなかった」

長門が確認した。

長門はどうされたんだ？

「主——にプロ——グラミング——に直接関与——されていた——自己プログラムが間——に合わな——いほど」

周防が答えた。

「私の内部情報すべてが関与される事態となった。修復プログラムも解析プログラムも間に合わなかった。」

長門が周防に答えた。

「外部からの処置が必要な状況となり、私は天蓋領域と呼称される彼女の助勢を受け、修復することが出来た」

「感謝する」と長門は頭を下げた。

「どういた——し——まして？」と周防が答えた。

「ああ、周防さん。それで合っているよ」と佐々木がクツクツと笑った。

「……」

俺は三点リーダーで黙るしかない。長門とここに来る前に確認を取ったが、仮に長門への干渉が第3者と見せかけた天蓋領域の行動であったとしたら、それは解るか？という質問に長門は応えられずいた。「可能性は低い」と長門は答えた。有りもしない第3の敵を操り、天蓋領域は干渉を繰り返していると俺は考えている。だが、長門を助ける行動の矛盾がどういった理由であるのかが見つからないとすれば、佐々木の提案がどの種であれ、未だはつきりと協力はしないでおきたい。

病院での佐々木と朝倉涼子達については、長門が証言した。

「情報統合思念体の残派による再燃であることが判明した」

「全て私の影響力の低下により突発的に起こされたこと」

長門は申し訳なさそうにそういった。状況について、ある程度の解釈が進んだ。あからさまな敵ではない、周防九曜。佐々木は理解を求めると言った。

「キョン。では僕達の話进行しようか？」

「佐々木、お前はどうしたいんだ？」

佐々木の唇から、言葉が零れる。

「僕は意識的な世界改変者らしい。そして、涼宮ハルヒさん。彼女は無意識的な世界改変者だ。正確には世界を改変出来る能力を所持するものという予測に対する位置付けだけだね」

実際、そうなって見ないと解らないってやつか。

「その通り。ただ、キョン。僕にはこういったエンターテイメントな状況に慣れてはいないのでせいぜい楽しませてもらおうと考えているんだ。勉学を決して疎かには出来ないのだが、大学を行けば死ぬほど楽しんでやろうと思っていたことが目の前で起こりつつある。望んではいなかった自分自身がやや環境によって、変化していることは認めざるを得ない。」

それで、佐々木はどうしたいんだ？

「うん。僕は何も表立って舞台上に上がりたい訳ではない。ただ、世界がどのような状況になるかを考えて、僕に出来ることがあれば協力するという立場で事を進めている。残念ながら、橘さんとはそこで大きく意見が食い違ってしまったがね。未来人である、彼と横にいる周防さんの協力は得られたよ」

橘が拒否をして、藤原と周防が認めたことって言うのは？

「ああ、キヨン。僕が涼宮さんの代わりになるということだよ。勘違いして欲しくないのは、取って代わる意味ではない。不測の事態に備えて、代わりを務めるということだ。何もなければ、僕達は永久に表に出ない。そうであればいいねと話しているんだ。つまり、君たちSOS団の現状維持に賛成だという意思表示だよ」

本当か？

「疑うのも、仕方がないことだが。何より僕はキヨン。君と争いたくないんだ、君たちの生活を脅かすくらいなら、僕は喜んで力を放棄するよ。逆に安定できるのであれば、この力行使するのにいささかの遠慮も持たないね」

佐々木の話は黙って聞いていた。

「政治の世界に似るよ。僕達の状況は君たちが第一党として存在、僕達は野党だ。でも、非常に協力的であると思って欲しい」

政治家が自ら協力を口にするときは決まって、裏があるはずだ。何を要求するんだ。

「さて、特に何もないさ。キヨン。君自身といえば、理解されるだ

ろうかな？」

俺自身？ 佐々木、俺にそんな価値はないぞ。何しろ、ただの一般人なんだからな。古泉の所属する機関のお墨付きでもある。

「そう、君は重要な一般人。ただし、そうだなあキヨン。例えばの話をするよ。この世界で意見が真つ二つに分かれるとする。人口が80億人として、40億対40億に分かれる」

そんなことはありえないだろう？

「そうだね。現実にはありえない。だが、この世界でそれが起こってしまっているとする。そして、その世界はいつまでも結論付かない。そこで、一人に投票権が与えられる」

ふいに、ハルヒの涼やかな声で宣言された一年前のあの台詞が蘇った。

「セカイの決定権が40億+1へと委ねられる。+1、それが君だよ、キヨン」

きつい冗談にしか聞こえない。だが佐々木は続けた。

「無論、セカイは半数で決して拮抗しない。だが、このセカイは拮抗している。ならば、選ばれた君は…ここからは推論になるが異世界人ではないかという話なんだ」

「当事者同士で結論しない場合、第3者に運命を委ねる。なかなかのシステムではないかと思うよ、僕は。」

俺が異世界人？ 何一つ変わらない普遍的な素養しか持たない存在だと俺は自負できるぞ。

「ああ、僕がそう言ったのもエンターテイメントに欠乏しているからかもしれない。僕か、涼宮さんか？ 選り取る人物が、異世界の住人であるとは如何にも面白い設定じゃないか」

クツクツと佐々木が笑む。

「勿論、君がただの一般人でたまたまセカイが分裂し、選り取る役目を担った最後の投票者であるかもしれない。僕の言ったのは涼宮さんの言動などを鑑みての、推論の域に過ぎない。最も、キョンはどう思うんだ。自分自身の存在について、何かしら薄々と気付いていたのかい？」

何にも気付いていねえよ、今聞かされた話も理解できん。俺はただの一般人だ。

「それは間違いないと思う。ただ世界中から一人だけに運命を背負わされる確率つてのはどれぐらいの確率になるんだろうね」

クツクツと佐々木がもう一度微笑む。もう一度聞こう、佐々木。お前は どうしたいんだ？

「僕が望むのはセカイの安定で構わない。キョン、君がソフトで。涼宮さんと僕がハードだ。どちらを選んでもセカイは続いていけるように努力するだけさ。仮の話だが、涼宮さんが世界の改変を行う可能性はまだある。通常であれば、たかが太陽系の一つの地球という世界が終わるだけであり、いささかも宇宙的な存在にとっては微々たる消失だけど、ただ涼宮さんの世界と言うのはその宇宙を巻き

込む、正にセカイであるからこそ問題なんだろうね。」

もしハルヒがセカイを改変したら？

「僕の力で。そう、君の協力でセカイを恐らく再改変する、それは元のセカイを意味するけど。恐らく、そのセカイでは涼宮さんは力を失うと思う」

正しく、改変というか再現は出来るのか？

「それは解らないよ、キョン。ただセカイはいくつかに分かれるのかもしれない。もし、確実に出来るとなればもっと積極的にセカイ改変希望者は涼宮さんにアプローチを仕掛けるだろうし、改変を横行させるかもしれない。ただその涼宮さんの力を解放し続け、僕もその復元を続けることがこの世界にとって是かどうか決して解らない。中学の頃に話したことがあったろう？ シュレーディンガーの猫だよ。」

何かあったときのため、存在はするが出来ることなら使わないでおきたい能力か。

「そう。僕らは決して涼宮さんから力を取り上げようとする敵ではないんだ。バックアップという存在なのさ。」

ハルヒの代わり？

「そういうことだ。キョン。僕が関心を抱いたのが、涼宮さんの能力は涼宮さんのためにあり、どう使おうと干渉するつもりが無い。セカイを改変できるほどの能力者にも関わらず、彼女が望んだことはSOS団という、ささやかな団内活動であることを思うと微笑ま

しいじゃないか。僕も是非、協力させてもらっよ」

信じていいのか？

「キョン、信じて欲しい。君と涼宮さんの関係を知った上での提案だ。涼宮さんの立場をひっくるめて僕は身代わりになると言っているんだよ」

俺は長門に意見を求めた。

「尊重できる意見ではあるが、同意は出来ない」

ただ、と長門が付け加える。

「あなたが決めること」

ハルヒに対しての処置ということは解った。一つ聞かせて欲しい、お前が先に暴走する可能性だってあるはずだ。

「確かに。僕はセカイを改変できるほどの能力はまだ持さない。ただ、不思議な事にささやかに望んだことが僅かながら叶えられているような気がする。それは、キョン。君が側にいてくれるからかもしれない。不完全ではあるが、能力の零れのようなものを僕は感じるんだ。ただ、暴走についてはそれは涼宮さんと僕は全く同じだね。2番手でありながら僕が先に嫉妬絶望物狂いに堕ち、世界を改変する危険性もあるということだ」

橘さんがいつか言っていた、佐々木さんなら大丈夫という指摘は全く当てにできないよと佐々木は分析した。

「では、キヨン。僕からの話は以上だ」

返答はいずれ受け取ることになるよと佐々木は言った。

そして、その言葉は本当だった。

俺は後日 佐々木のいる閉鎖空間へと招かれる。

急 - Quick end -

佐々木を野党として認めるのか。

涼宮ハルヒ政権は2期目にして他党からの横槍が入る。ただ党首からはどういう訳か倒閣ではなく、入閣の打診だった。もしくは、連立という体制だろうか……政治は良く解さないので解らん。ただし投票権は俺だけ。こういう世界なのかと首を傾げる。

昔見た漫画で、日本がアメリカ51番目の州として加入し結局は日本が中心となってアメリカの大統領になると言うコメディ漫画があったような……どうでもいいことなんだが、現状 説明するにはそういった類でしか説明が出来ず、ただ流されるだけの俺は少々憂鬱だ。

佐々木とハルヒがどういう存在なのか。

世界にとってではない。
俺にとってだ。

長門の熱、佐々木のフォローそして打診。その後のことを少し語る。

携帯にメールが入り、確認すると佐々木だった。

夕暮れのSOS団部室。長門の熱も治り、それといってすることもなくただダラダラと過ごした。そろそろ、長門の本を閉じる合図か

ハルヒが帰宅を宣言する頃合だった。先に鞆を手取る。

「ハルヒ、先に出るぜ」

「あ、もう帰ろうと思ってたところ。いいわよ、別に」

とハルヒは何も気にしていないようだったが、一応 言うておこう。

「佐々木が来てるらしいんだ」

と、その単語を聞いた瞬間 ハルヒは間違えて、ガムを飲み込んでしまったような顔へと移行した。

「じゃ…あね、キヨン」

ハルヒはささやかにぎこちない挨拶をした。

部室を一番に出る俺が校門まで一直線に向かうと、佐々木は自転車で出迎えてくれた。

「やあキヨン。団内活動は終わったのかい？ 直ぐに出てきてくれるなんてありがたい。」

佐々木は目立つ。格好は制服姿だった。ジャケットにギンガムチェック地のスカート、赤のネクタイを締めている。そして自転車を支えながら、指で挨拶の格好を作っているのか、細く長い指がフレミングの左手の法則のような形で俺に向けられていた。

ところで、今日は何用だ？ あいにく朝比奈さんのお茶なら今日はやめておいた方がいい。学校に他校生が入り込むのも、いいもんじ

やないしな。夕暮れの北高 校門前で俺は佐々木にそう言った。ふと、ハルヒが消えたあの日のことを思い出す。ハルヒならば、目的のために手段を選ばず侵入するだろう。だが、佐々木は……

「そんな用向きではないよ、キョン。今日はどちらかといえば、僕とキミと涼宮さんの関係性は抜きにして、話をしようじゃないか。」

何の話だ？

同窓会の話を通藤からせつつかれてねと佐々木。佐々木はふと俺の後ろの校舎へ視線をやると形容しがたい笑みを広げた。ハルヒの姿が見えたわけでもなかるうに。俺も振り返って、そういえば俺もハルヒの帰宅タイミングが気になる。何故気になるのかはよく解らん。

とりあえず、この場を離れないか？ と提案したところ、佐々木は自転車の二人乗りをカウンターで提案してきた。中学以来、高校生にもなつて自転車で一緒に下校することになるとはあの時の俺には予想も出来ない。しかも、相手は同じ佐々木だ。運命？ そんなことはあるはずもない。

中学時代とは違い、少し髪の伸びた佐々木を背に乗せて、俺は北高の坂道を一気に自転車で駆け降りをした。

ハルヒの様子がおかしいと告げられたのは、その佐々木と下校した日から一週間も経たないうちだった。

その一週間の間に、俺は佐々木と良く会っていた。まるで宇宙的に手引きされていたのかと思うほど、SOS団の活動が終了と同時に

佐々木から連絡が入ったり、道で偶然出会ったりとタイミング良く接触を繰り返していた。佐々木はハルヒの存在、その立場を介して積極的に介入しようとしているのか。最初の1、2回はこれらを込めたオフィシャルな口実であったが3、4回ともなると非公式な誘いだった。やあ、キョン。散歩にでも行かないか？ と誘う訳も適当になりつつある。ハルヒを介して再会した俺たちはまた、笑い合うようになったんだ。

そんなある日。

「そろそろかな？」

なんのことだ？ と俺は聞き返した。佐々木は形容の出来ない笑みをする。佐々木は何でもない話のように、こう言った。

「僕が恐らく閉鎖空間を発生させるだろう。明日か明後日頃に」

何故解る？ 驚きはしなかった俺は佐々木の平坦な声と説明に恐れ入っているのかもしれない。意識的な世界改变者は素直に心を吐露している。

「キョン。キミに再会してから僕は狂いっぱなしだ。ここまで自分に不安定な気持ちが見れるとは思っても見なかった。理性的に論理的に切り捨てたい感情というものは膨らむ泡のように膨らんで潰す。ただそれにも限界があるみたいだね」

セカイを改定したいのか？ 佐々木。

「そう云うわけじゃないと思う。ただ僕は……さて。どうしたいんだろうね」と佐々木が微笑んだ。

「涼宮さんは願望を叶える事が出来るらしいね」

ああ、絶滅したハトを出したり、自分の都合の良いように周囲の環境情報を操作する力があるらしい。

「もし、涼宮さんが僕を殺したいと願えば、それは叶うのかな？」

話が飛躍しすぎではないか？ 佐々木よ

「もしだよ。じゃあ、涼宮さんが僕を排除したいと願えば、それは最終的に叶うことになるのかな。遠い場所への転校や、行方不明になるといった事象だ。キョン、先ほど言った自分の都合の良いように周囲の環境情報を操作できるといった能力はそれが例えば、同じ環境能力改変者には通じるのだろうか？ それとも、先制に妙味があり先に行動したほうが圧倒的アドバンテージを持つものなのだろうか？ そこで僕が消えて、キミの記憶からも消えていなくなりそのまま世界が続く。それは少しだけ僕にとって業腹だな。」

佐々木、それは本当なのか？

「何がだい？ キョン」

ハルヒがお前を疎ましく思っていることや殺意を感じていると。

「いや、はつきりとしたことではないが僕がキミたちのルーティンに介入しているのは確かだろう。そもそも、涼宮さんの精神状態もやや攻勢に転じていると彼女から聞いたよ」

古泉と対する橋か。

「そう。ただ現れては積極的な破壊行動は控えていた巨人はやや、積極的に行動をしているらしい。これは涼宮さんのストレスがやや常在化している証左になるのではないだろうか？」

古泉に一度確認してみるか。

そういつてその日は佐々木と別れた。

佐々木の言葉は的確で正確すぎる。

その夜、眠りについた俺は古泉に確認する暇もなく、佐々木が発生させた閉鎖空間へと招かれた。

オックスフォードホワイトの夜明け前を思わせる暖色の世界。

見慣れない学校の一室で俺が独りで目を覚ます。

寝間着がわりのスウェットは消え失せ、ブレザーの制服がまた俺の身体をまとっていた。佐々木の造り上げる2度目の閉鎖空間だと直ぐに気付いた。

ただし当該対象者は隣にいなかった。起き上がると、見慣れない教室から外へと歩き出す。静寂で暖かな世界。俺の服装は北高だった。ここは恐らく、一度も行つた事がないが佐々木の通う学校なのだろう。記憶における……いや、閉鎖空間における学校という立ち位置について誰かに説明を願いたいものだ。なぜ、閉鎖空間といえば学校が造り上げられるのか？ 心理的な考証をユングまたはフロイト、

いやこの際 佐々木でもいいので説明願おう。そんなことを考えながら、歩き回っていると背後から声を掛けられた。

「やあ、キヨン」

佐々木、毎度 その挨拶はいいとして後ろから声を掛けなくてくれ。特にこんな誰もいない世界では。

「ああ、すまない。ただ遂にこの時が来てしまったんだね。きちんと布団で寝ていたはずなのに……ふふ、僕の精神が造り上げた世界に自分自身が入り込むというのは実に面白い。キミが目覚めたとき側にいなくては不安かもしれないだろうが、興じるところも有りそこらを見回っていたんだ。面白い場所があったよ。」

そういった佐々木は制服姿だった。相変わらず、ギンガムチェック地のスカート、赤のネクタイを締めている。

「僕の閉鎖空間。心の中へようこそ、キヨン」

佐々木は突き出した指に俺の視線を集めて、形容しがたい笑みを浮かべると歩き出した。

「キヨン、こつちに僕達の中学時代の教室が有る。これからの事は想い出深いあの教室で話そうじゃないか。」

佐々木は歩きながら、どこか浮かれているように思える。高揚していると言った方がいい。いつもらしくないのは不安になるぜ。

「そうとも。こんな世界。本当にあることを知った僕の心境は高鳴っているのさ」

そういつて佐々木は二つ教室を通り過ぎ、階段を下りたすぐの教室へと入った。

紛れもなくそれは俺たちが過ごした教室だった。四年の月日が経過しているので、風化している景色でもあるが補ってこれは教室だと認識できる。佐々木は自分の席を見つけるとそこに座り込んだ。俺は席に座らず、教卓から佐々木を見据えた。

「さて、キヨン。これからどうなるのか？ 是非、キミの意見を聞きたい」

閉鎖空間のスペシャリストじゃねえ、だがあそこから帰還したのは事実だ。いくつか方法はあると思うが、ハルヒの唇が気になって離れない。あれしか解除方法がないとすれば……夢なら早く覚める。いや、それはないか。橘の侵入、或いは周防でもどちらでもいい。ヒントが欲しい。

「佐々木、橘はこの空間に気付いているのか？」

「橘さんかい？ さて、どうだろうね。気付いていても、僕は気付かないでくれとお願いをするかもしれないな。ところでキヨン。キミは涼宮さんの閉鎖空間をどうやって切り抜けたんだい？」

いきなり爆弾を落とされた。平素を装うが無理だった。言葉に詰まる、ついでにそれが表情に出た。

「答えたくねえな」

「おや、キヨンがそれほど落ち着きをなくすとは珍しい。答えずと

もいよいよ、キヨン。キミはすでに経験済みだ。僕は慌てることなく、それを待てばいいだけのことだ」

席に座っている佐々木が落ち着いていられるのはどうしてだ？ すべてを知っているかのような顔で俺を試しているんじゃないのか？

「キヨン、この世界は奇しくも君の選択で出来ている。実に蠱惑的だと思っただろうね。今、君の置かれている立場は男性冥利に尽きるというものだ。つまり、僕か涼宮さんかどちらかを選ぶと言う選択肢ではないんだ。そこを誤ってはいけない。僕も涼宮さんも選ぶという選択肢を君は受け入れられるかどうか。話はそういう話だと思うよ、キヨン」

佐々木、何を言っているんだ。

「愛の告白と受け取ってもらっては困る。ただ僕は本能に従うことにした。キミを欲しがっているのは彼女、涼宮さんのことだね。彼女だけではない。僕も同じだ。この間、再会した時から僕の心は乱れっぱなしだ。キミのその顔があんまり久し振りだったので、懐かしかった。と、同時に邪魔っけなノイズが何故か僕は享受できたんだ。中学生の頃では考えられなかった必要性因子がそこにあるんだ。キミの迷惑を考えてられないほど、僕はキミと」

佐々木、俺と付き合いということか？

「違う」

話しの流れが良くわからない。お前が望んでいるのは涼宮ハルヒの立場なのか？ SOS団として俺たちと一緒に遊びたいのか？ この世界を作り出した意味はどこにある？ 説明してくれ。

「キョン、キミが必要だと思う。ただし、僕はキミが誰と付き合うと必要だという意味だ。その関係性が続くのであれば、僕は僕のルールで続けさせてもらうよ。例えば、片思いの人が両思いになりたいと誰が決めるんだい？ その人はその人で添い遂げられない想い、そんな関係性が好きであえて上位変換はしようとしていないのかも知れない。すまないキョン、この手の話はどうも論理的に説明し辛いんだ。質問をしよう。キョン、キミと恋愛関係になる人は一人と決まっているのかい？」

「一人でいい」

「本当に？」

佐々木はどこか枠組みを作っている。常識から考えれば、少し変だ。そういわれる枠を持っている。佐々木から、二の矢が告げられた。

「彼女はもう決まっているのかい？」

「……」

三点リーダーで答えた。俺の心は決まっている。ただ、それを誰にも言いつもりはない。言わされるのは断じて断る。俺はその時になれば、自分から言う決めているからだ。

「僕ではない。それだけでいいよ、キョン。ただ、身勝手かもしれないうが僕の提案は受け入れて欲しい。」

佐々木、俺に出来ることなら協力する。お前には世話になった。そりゃ、ハルヒや長門や朝比奈さんたちと比べれば、小さいものかも

しれないが俺にとってお前は大切な友人だ。

「僕は彼女の代わりだ。以前、そう言ったね」

佐々木は言葉を続けている。俺の耳には辛うじて入ってきている。

「彼女との関係性が上手くいかなかったら、僕と付き合えばいい。僕は別段、急いている訳ではない。恋愛に臆病というつもりはないが、向かい合うのはどうも苦手だ。少し斜めぐらいからキミを見ていたいと思っていた。僕は成就しない片思いでもいいと考えている。涼宮さんとの関係性が一生続くのなら、僕はキミの周りをささやかに動くだけの存在にしか過ぎない。ヒロインは彼女で結構、僕は望みが希薄なたちでね。キミを真正面から奪おうだなんて考えたくないんだ。涼宮さんのフォロワー体制の代わりの存在で構わない」

佐々木はそう一気に告げた後

「さて、キョン。前回、キミはどうやってこの状況を切り抜けたか。忘れたとは言わせないよ」

佐々木はそう云って近づいてきた。朝倉涼子がナイフを翻し、近づいてきた時よりも恐慌としている。

佐々木とキスをした。目を瞑るのは礼儀だが、驚いて目を開けてしまった。

佐々木の声は小さくなり、やがて僅かに囁いた。

「涼宮さんとの解除コードがキスならば、僕との解除コードは変えさせてもらったよ」

そして佐々木は最後に「もし、還って僕と君が恋人同士の関係になり、行為に及ぶとき……覚えているなら、今度は口にキスはしないで欲しい」と言い残して、俺の目が覚めた。

ベッドの上で、寝汗を掻いた。濡れている身体。夢であって欲しい。これを確かめる必要はない。

ただ佐々木は意識的な存在だ。

こんなばかげたことを夢のせいにするのはどうかしている。口にするのも嫌だ。だが、佐々木は本当に俺とハルヒの関係性が破綻するまで夢のことは口にしないだろう。嫌な夢を見た。どんな夢だったかは思い出したくも無いが、目覚めるならもつと早く目覚めたかったと本気で思う。時計を見ると、- A M 2 : 2 2 - 三つの2がフイーバーしていた。

やはり佐々木。お前は変わり者だ。

佐々木との話はこれで終わりだ。後はS O S 団の映画について語ろう。

「映画のラストはどうするんだによるん？」

映画の撮影は順調に進み、8割方取り終えたところでハンチング帽を華麗に被り、S O S 団以外のメンバーを首尾よく操っては映画の撮影役をすべてを買って出してくれた総合プロデューサーのような存在。スポンサーでもある鶴屋家の次期当主で在らせられる鶴屋さん

が俺にそう言った。

「どうでしょうか？」

俺は何の気もなく返答した。俺の脚本ではなんでもない日常で終わるようにしていた。そこを突っ込まれた。

「キョン君は宇宙人と未来人の二択ならどっちを選ぶんだによるん？」

鶴屋さんの笑みはどことなく、畏のような気がした。俺はそれに困ったような笑みを浮かべるだけで答えることはしなかった。朝比奈さんとの別れ、長門との別れか。とふと、考えたりしたけれど正直にその時になって見ないと解らないことは多い。その時の俺は何をするか、時間が不可逆の性質を持っている以上、何も変えられないということだ。

そして、それは夜を迎えた時だった。

いつも通りに眠りに付こうか付くまいか、あいまいな時間に携帯が鳴り響く。着信相手はハルヒだった。嫌な予感がしつつ、俺は応答することにした。切れば、家にまで来そうだからな。

「あんた今、家でしょ？」

「何の用だ？」

「映画の撮影。私たちだけでするから、直ぐに行くわよ」

「どこに？」

ハルヒは行き先について答えようとしなかった。

「とにかく、あんたは家で待ってて。着いたら連絡するから。あと」

俺に拒否権はないのか？ と尋ねるまでもない。ただハルヒは何故、今日にこだわり、この夜 しかも寝る前の時間にこだわ리を持っているのか。理解に苦しむ。こちらがいくら譲歩しようとも、あちら側が譲る気がなければ交渉は決裂するに決まっている。ただ、俺がその非常識な提案について、断ろうとした時 ハルヒにしてはか細い声が聞こえた。

「お願い」

こうして、俺とハルヒは夜の学校 北高へと着いた。移動手段については語らない。現在、俺とハルヒがしている格好もだ。なぜ、こんな夜中に制服で学校へ忍び込まねばならん。教師もしくは誰かに見つければ、説明が全くつかんぞ。

「ノート忘れましてって馬鹿みたいに言えばいいのよ」

ハルヒは全くその事について意見を介さないつもりだ。瑣末過ぎる案件は考えもしない性格は今に知ったことではないが、現役 高校生が学校に忍び込んで何とでもなるのは確かだ。ふと、思った。まさか校庭にでっかい落書きをするんじゃないだろうな。

「しつ。いいから着いて来て」

ハルヒは俺にカメラと三脚を預けたまま、足早に校庭から校舎に侵入すると、まんまと鍵を開け手招きをした。夜の校舎に侵入するの

は結構不気味だ。人の居ないと確定している閉鎖空間とは違い、誰かに見つかったらという余分な心配が生じる。

ハルヒと俺は結局 誰にも見つからず、SOS団の部室へと侵入を果たした。そして、そこで渡されたのはハルヒ謹製の台本だった。ハルヒはこう言った。

「DVDなんかでよくあるじゃない？ 初回限定特典としておまけが付いて来るって。これはそれよ、あんたとあたしでやるのよ。」
そういつて、ハルヒは俺に台本を渡すとSOS団部室の電気を付けた。おい、見つかってもいいのか？

「まあ、最初のシーンは電気を消さないと始まらないんだけど、台詞あんた覚えられないでしょ？ 音声オフだから、要らないといえはいらないんだけど。あたしはディテールに拘りたい訳。物事、成功は細部に宿るってヤツよ」

ハルヒから渡された台本を確認する。この時ほど、自分の置かれている状況について、露とも表情に出さない演技をするのは今まで散々色んな事態を潜り抜けてきたからだと思い返さずに入られなかった。ハルヒの台本にはあの時のことが描かれていたのだ。

ハ「……キョーン」

ハ「起きてよ」

ハ「ここ、どこだか解る？」

ハ「目が覚めたと思ったら、隣りであんたが伸びていたのよ。どういうこと？ どうしてあたしたち学校なんかにいるの？」

キ「ハルヒ、ここにいたのは俺たちだけか？」

ハ「そうよ。」

「ハルヒ、これはどういうシーンなんだ？」

俺は疑いなく、ハルヒに尋ねた。唇をグツと嚙んだ状態から、何か言いたそうにでも違う何かを話している。何かを隠しながら、ハルヒは説明している感じだった。

「あんとあたしで夜の校舎に紛れ込んだ話よ。ただの……」

そういうとハルヒはとにかく映画撮影を始めるわよ、さあ 台本を覚えたらそこに寝なさいと告げた。俺の心臓は高鳴っていた。ハルヒなら、その違和感に気付くだろう。アレは悪夢じゃなかったと気付くだろう。今この時がすべてを告白するべきだろうか。ハルヒの作戦にはただ恐れ入るだけだった。

目覚めた俺たちはどうなるんだ？ とハルヒに尋ねた。

台本越しにプレアデス星団の瞳は疑いのまなざしでこう尋ねてきた。

「あんとならどうするの？」

「台本に書いてあるんだろ？」

ページを捲ろうとしたらハルヒは急にストップを掛けた。

「ちょっと待つて。あんたの意見を先に聞いてから、台本は書き換えてもいいわ。」

「別に意見なんかねえよ」

と知らぬ振りで答えた。青い巨人が現れてと話そうものなら……

「……そう。じゃあ、捲つていいわよ」

ハルヒは当たりを外した小学生のように大人しく次のページを開く許可を出した。

ハルヒの台本には青い巨人は出てこなかった。ここから出られない話だけが集約されていた。

シーンはハルヒがこの出られない空間に対して、受け入れようとしてるところだった。

キ「一生こんなところにいるわけにもいかないだろ。」

ハ「なんかなるような気がするのよ。でもどうしてだろ、今ちょっと楽しいな」

「ハルヒ。こんなおまけ　いつ思いついた？」

俺はカメラを止めている間、ふと聞いてみた。

「少し前：入学してちょっと間してからかな」

ハルヒは自分の言葉よりも俺の表情を見つめようとしていた。

その大きな瞳でこっちをじっと見つめてくる。言葉を交わすたびに

「そっか」

映画をとり始める前じゃないかという突っ込みは止しにしていたら、

微妙な空気が流れる。ハルヒの視線、何も語らない俺。時間がかかり過ぎた気がする。誰もこの部屋に來ない。照明は煌々と付いている。だが、誰もここには來ない。まるで閉鎖空間のように。

「キヨン、あんたSOS団のことどう考えているの？」

シーンは校庭へと移るという説明を聞きながら、ハルヒがそう告げてきた。

「高校に入学して以来、俺の居場所はずっとそこだ」

ハルヒのその質問に慎重に答えるということはしなかった。思わず、自分の真情を話してしまったように思える。一瞬、心の堰を切ってしまった。無防備な状況で俺はハルヒと問答をしていた。

「もしあたしが、あんたSOS団辞めてって言ったら？」

「そんなことはありえねえよ」

「あたしも辞めて、あんたも辞めるとしたら？」

「ハルヒ……嫌になったのか？」

「別に。なんてね、今の冗談よ、あんたを試しただけ。さ、続きを撮りましょう。あたしはここでそう云うわけ。この学校に……この場所に居続けたい」

ハルヒは傲岸不遜な瞳をいつの間にか復活させていた。その瞳で語りかけ、その掌を差し出した。

「キョン、あんたは戻りたいと言ってここに残りたいと言うあたしをここから連れ出すの」

キ「俺は戻りたい」

台本どおりに話して、校庭に向かう。深夜の校庭にカメラを設置した。そこまで俺とハルヒは手を繋ぎ、駆け抜けるシーンを演じた。

主演 涼宮ハルヒが俺の手を払いのけた。

そしてその瞳は本当に怒りを込めている様なルビーレッドにも思えた。

しかし、ハルヒは急に表情を崩すと微笑んだ。そしてこう言った。

「ここからはアドリブね」

キョン、目を閉じて とハルヒが囁いた。言われたままに、俺は目を閉じる。目を開くと夢だったなんてオチはなく、髪を括りつけたハルヒがそこにいた。あの時よりも、僅かにハルヒの髪は伸びていた。ハルヒの頬が印象めいて見え、そして白い頬が柔和な形を造ると微笑んだ。

ハルヒが唇を近づけてくる。

ハルヒは俺の瞳を釘付けにして離さない、直前まで離さない。俺は瞳を閉じることを今度は拒否した。目を閉じれば、また夢にされてしまう。

ハルヒは唇を重ねた直後 全く記憶からキスを忘れたようにこう言った。

「このシーンは没ね」

いつからこうなってしまったのか、自分自身に理解が出来ず苦しむ。どこの誰がこんなシナリオを考えたのか、巻き込まれるだけの自分自身を情けなく想い、苦悩する。別世界、もし平行世界があるのなら、こういったシナリオには決してならないだろう。ジョン・スミスという取って置き of 切札も華麗に表へ見せるシーンが必ずや用意されであろう。自分自身が製作者であるならば、必ずや巻き込まれるだけの存在には決してならないと誓いたい。

自分の思いは置いておき、後日談を最後に付け加えておく。

ハルヒから命を受けた小説への変換作業は大詰めを迎えていて、後はタイトルを付けるのみとなった。音声OFFのSOS団の活動記録にはこの小説が付く。というか、この小説がないと訳が解らん。ただ、俺達のムービーでしかない。とりあえず、小説のタイトルをいかにしようか悩んでいるところだった。

俺はこの2年間を振り返った。

俺たちSOS団はいつも考えずに事を始め、終わってから考え始める。幾分か考えたが自分にはコピーライティングセンスが欠如している事実を諦めとともに受け入れ、その十秒ぐらい後で憂鬱という言葉が思い浮かんだ。

そんなことを考えながら、もう一つ思いついた。

ハルヒに渡すDVDにだけクレジットを付け加えようと思っている。

俺の名前の横にもう一人の俺。

勿論、ジョン・スミスと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5029o/>

涼宮ハルヒの主演

2011年5月23日04時57分発行